

# 新書がよい

どんな分野でも、その職業に長年携わっているプロフェッショナルなら、自分独自の仕事の進め方や、失敗への対処法を身につけているはずだ。

木村俊介著「『調べる』論」(NHK出版新書・903円)はジャーナリスト、研究者、医師、航空機開発者、狂言師ら20人へのインタビュー集。調査の手法から、調べたことを誰にどのように伝えるかまで、丹念に聞き出している。

日本の食料自給率が低いという「常識」をひっくり返した農業雑誌

## 新刊

★金丸弘美著「幸福な田舎のつくりかた」 地域に対する誇りが人をつなぎ、経済を動かす一冊。そんな「まちおこしのトップランナー」を数多く紹介している。



幸福な田舎のつくりかた



年間120万人が訪れる今治市のJAおちいまばりの直売所「さいさいきて屋」。農協の合併を機にできた小さな農産物直売所が地産地消の大きな拠点となった仕

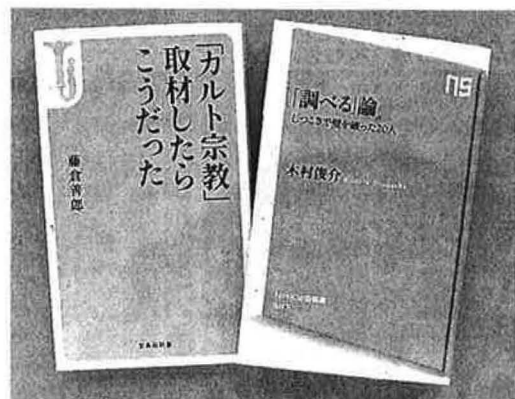
組みづくりや工夫が明かされる。ほかに、若者の力でにぎわいが戻った熊本県阿蘇市のレトロ商店街、グリーンツーリズムで都会っ子を多く受け入れる長野県飯田市など。地方を笑顔にするアイデアが詰まった一冊だ。(学芸出版社・1890円)

★荒蝦夷ほか企画・編集「その時、ラジオだけが聴こえていた」 東日本大震災の直後から、IBC岩手放送ラジオが108時間にわたって続けた生放送のドキュメント。同封CDには当時の放送を約40分抜粋し収録。(竹書房・1365円)

★アンソニー・グラフトン著、森雅彦ほか訳「アルベルティ」 レオン・バッティスタ・アルベルティはルネサンスの建築家にして、「建築論」「絵画論」「家族論」の著者。この万能人をイタリアの都市世界の変容とともに追った評伝。(白水社・7560円)

★田中孝幸著「園芸と文化」 海外か

## 「『調べる』論」など



編集者の浅川芳裕氏は、「事実に近づかないで事実っぽく書いているも

# 「常識」を考え直す行為

のが、世の中には溢れている」と憤る。また、文化人類学者の渡辺靖氏は、膨大な資料を読んでも、フィールドワークの現地に着いたら、事前の情報をすべて忘れて自分の目で見るのが大事だと言っ。

著者は「調べること」を「問いから新しい現実を発見しようとする姿勢のことではないか」と位置づけている。それは「常識」とされているものが本当に正しいかを考え直す行為でもある。

調査というと堅苦しいが、調べたことをもとに考え、仕事を進めていくことは、社会人なら誰でもやっ

# 読書